

# 京都市東山区における野生鳥獣と市民の関係の考察

松塚 瀬里

キーワード：京都市東山区 野生鳥獣 哺乳類相 出没状況 獣害対策協議会

野生鳥獣による鳥獣被害が全国的に拡大し、深刻な問題となっている。京都市東山区においても例外ではなく、近年、野生鳥獣の目撃情報や人身被害が新聞で多数取り上げられ、増加の兆しが見られる。東山区は農村地域を有していないため農林被害拡大の可能性はないが、様々な商業施設や住宅、世界文化遺産の清水寺をはじめとする社寺仏閣、史跡、重要文化財が多く、観光客も多く訪れるため、今後観光都市ならではの深刻な人身被害や建造物被害を招くことが予想される。しかし、農村地域での被害の現状や対策についての多くの研究が行われてきたのに対して、東山区に代表される都市型の鳥獣被害に着目した研究は行われていない。

本研究では、今後、京都市東山区において起きるであろう鳥獣被害を未然に防止するために、京都市東部の東山地域の哺乳類相を明らかにする。さらに、都市部の市民が受けている野生鳥獣被害の現状を調査し、これまでの地元行政が主体で行われてきた鳥獣被害対策の動きについて整理して明らかにすることでより効果的な行政を主体とした鳥獣被害対策の手法について考察する。

4台の自動撮影カメラ(ハイクカム SP4G)によるカメラトラップ調査により、ニホンザル、ニホンジカ、イノシシ、タヌキ、アライグマ、ハクビシンなどの12の哺乳類種が撮影され、その存在が確認された。イノシシとタヌキの出現頻度が高く、ニホンザル、ニホンジカ、その他の哺乳類種の出現頻度は低かったが存在が認められた。ニホンザルは1台のカメラのみで撮影されたが、ニホンジカ、イノシシ、タヌキは4台すべてのカメラで撮影され、東山エリアに広く生息していることが示唆された。ニホンジカについては、現在まで、東山区において生息域及び個体数に関する具体的な報告は見られなかったが、本研究結果より、その存在が認められた。

野生鳥獣被害状況の調査では、ニホンザル、タヌキ、イノシシ、ハクビシンなど8種の野生鳥獣に関する通報があった。ニホンザルの通報数が最も多く、全通報数の69%であり、年間を通じて通報があった。ニホンザルは2月に最も通報数が多く、食物を得ることを目的とした行動が多数報告された。

イノシシについて、カメラトラップ調査による撮影頻度指標の高さと通報数の少なさから、現段階での都市部への出現数は少ないが、都市近郊の山麓部まで危険が迫っていることが分かった。今後、起こりうる野生鳥獣被害を知るためにも、山麓部の現状を把握することは重要であると言える。

地元行政が主体の獣害対策は、2015年に清水寺にニホンジカが侵入したことをきっかけに2018年に東山獣害対策協議会が発足したところから始まり、観光客に向けた啓発チラシの作成や野生鳥獣出没情報の共有の仕組みが整備された。現段階では東山区全域における「野生鳥獣出没情報報告書」による通報状況のみの共有であるため、協議会参加者全体がニホンザルに対する問題意識を強く持ち始めている。今後は、通報状況の共有のみにとどまらず、カメラトラップ調査によって明らかになった、東山エリアの哺乳類相と種ごとの撮影頻度や時間帯・季節変化についても共有を行い、具体的な対策をとるべきである。